

4. 家庭洗濯に関する研究（第2報）おむつの布及びカバーに付着する大腸菌群について

福岡女子大学家政学部 ○平松 園江
花田瑠美子

1 : 皮膚の弱い乳児の用いるおむつとカバーは、特に清潔である事が要望される。清潔は目に見え、臭に訴えるもののほか細菌についても検討を要する。千葉医大の池田はおむつかぶれの予防と治療に、おむつの細菌的清潔を強調し、次亜塩素酸ソーダの有効なことを述べている。そこでふつうの洗濯で除去されるおむつやカバーの細菌的清潔を調べるため、便汚染後洗濯したものについて、乾燥状態に従い大腸菌付着の最確値を求めた。

2 : 一定の方法で便汚染し、洗濯した綿おむつ、P. V. C. おむつ、各種のカバーを乾燥の課程で含水量をはかり、各々を所定の滅菌した容器に一定量の滅菌水を入れ、これに被検物を入れ、一定時間振盪、放置し、この浸漬液を原液とし本間氏変法により菌検査をした。

3 : ①便付着後石けん洗、すすぎ、脱水した後は大

腸菌の付着が多いが、含水率2%以下となれば直射日光下でも室内でも菌は認められぬ。②アイロンかけは滅菌に(相当含水量があっても)有効である。③晒とP. V. C.の編おむつの洗濯後の菌付着を比較するとP. V. C.編物おむつが少ない。④次亜塩素酸ソーダに界面活性剤添加の市販洗剤の指示量で洗ったものはどんな含水量でも菌は認められない。⑤おむつは乾燥し難いためか、洗濯をしたのみでは付着大腸菌が認められぬようになりにくい。